



深田久弥

# 山の文化館だより

令和8年  
夏号

深田久弥 山の文化館  
〒912-0067  
石川県加賀市大聖寺森町十八  
TEL 〇七六二 七二一三三  
FAX 〇七六二 七二一八一

## 新館長就任



しばらく空席だった  
深田久弥山の文化館の  
館長が決まりました。  
去る四月一日付で、田  
中康典さんが新しく館  
長に就任されました。  
委嘱状贈呈式は、加賀  
市役所市長室で関係者  
立ち合いのもと行われ  
ました。

田中康典さんは書籍関連のお仕事をされてきた方で、書物について造詣が深く、山に關しても経験豊富で、県内唯一のセブンサミッターであり、プロの山岳ガイドでもあります。新しい館長のもと、今後より一層の内容充実に尽力したいと思っています。

## 館長挨拶



初代館長・高田宏先生の後を継いで二代目館長職を拝命した田中康典と申します。  
五十歳で地元企業の

役員から東京の出版社へ転職。七年かけて、二〇〇九年にエベレスト、南極を含め世界七大陸最高峰のすべてに登頂。これまで二十回

海外へ出かけ延べ三十五の国と地域を訪れました。また二〇一六年三月までFMラジオ生放送『山、自然そして命の時間』でパーソナリティを十三年間務め、二〇一六年四月からはNHKテレビ番組『ゆるる山へGo!』で北陸三県の山岳ガイドで出演中です。



さて四月からの館長の使命は、【いつまでも成長し続けるミュージアムを目指す】(初代館長の言葉)ということであると認識しております。加賀体育館にボルダリング・ウォールを発見したこともあり、親子ボルダリング教室などを企画し、親子はもちろん一般の方々も楽しめるイベントを育て上げられたらと思っております。多くの方々にご来館頂けるよう、いろいろと企画を考えてゆきます。皆様のご来館お待ちしております。

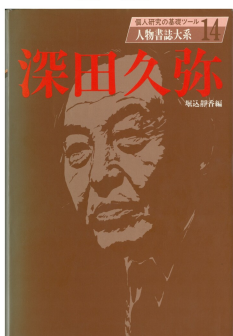
## この一冊

今回紹介するのは、題名の「この一冊」

から外れるが、二十一冊の雑誌『岳人』である。そして、この連載が一冊の本につながっていくのではなからうか。『岳人』297号

(昭和47年1月)から始まる連載で、一年の間をおいて、327号までの二十一回続けられた。この連載の題名は「深田久弥の作品と文献」で、著者は、中馬敏隆・堀込静香両氏の共著である。内容は、旧制中学時代の校友会誌『新明』に小説を投稿したことに始まり、深田久弥の文筆活動について解説している。そして、小説、山岳随想の発表された順に、年表としてまとめられている。昭和二十年までを第一期、昭和三十二年までは第二期、三十九年までを第三期、四十六年までを第四期と四つの期に分けている。最後の回は「終回」と題し、著作、棟の花、山歴の三章に分けて解説している。

この連載が、堀込静香著『人物書誌大系14 深田久弥』に繋がっていくのであろうか。この著作は我々にとつて、深田久弥について調べるときには無くてはならない一冊なのである。

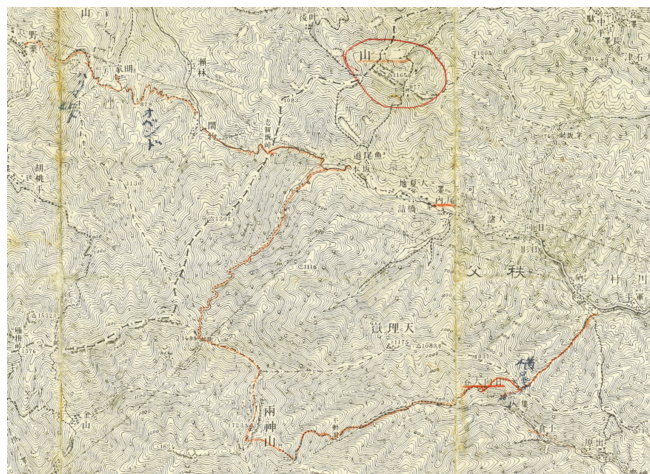


## 久弥と五万分の一地形図と赤鉛筆と

その33

深田久弥愛用の地図リストに、書込み多数と記載のある「万場」（地勢図「長野」の4番）を探した。二枚あったが、一枚は地図に記載されていない山、沢、峠などの名前がペンでたくさん書き込まれているだけだった。もう一枚は、赤鉛筆のラインが引かれており、山名に傍線が引いてあったり、丸で囲んであったりする。赤鉛筆のラインは納宮から日向大谷、両神山、八町峠、志賀坂峠を経て野栗まで引かれている。とても長いラインである。途中、櫛尾沢峠、オバンド峠、ハリマ峠の三つの峠名が書き込まれている。この地図のうら側に日程など書いたメモがあった。

両神・御座（藤島敏男、望月達夫）とあることから、三人で出かけ、両神山の後御座山に登ったようである。日程について



いてのメモは、一〇月二十一日午前九時池袋発西武線、十二時秩父着、午後二時バス発三時二〇分着、快晴とある。そのあとの詳しい記録は書いてない。ほかには「二十三日志賀坂峠、谷」とだけ書いてある。

この地図に関わる文章を探した。地図にあるラインは昭和三十四年十月の山行であると思われるが、これについてのものは見つけれなかった。しかし、「日本百名山」の「両神山」には、「秩父の町から納宮までバス、そこから櫛尾沢峠を越えて、日向大谷にある両神山の社務所に泊まった。翌日山頂へ向かった・・・」、両神山に登頂後「八町峠へ出た」とあるのでまさにこのルートの記述である。他にこの地図にある山の文章としては、「二子山」「父不見山」の二つがあった。「二子山」は昭和四十三年三月号の『ハイカー』に掲載されたもので、前年十二月の山行記録である。二度目の両神山は白井差から登り櫛尾沢峠を経て納宮に下った。翌日は題名にある通り、二子山に登っている。「父不見山」のほうは、昭和三十三年十二月三日、志げ子夫と二人で出かけた山歩きの紀行文である。早朝家を出、高崎線本庄で降りバスで鬼石を経て万場に向かった。十石峠から父不見山に登り、杉ノ峠を経て万場に降りた。日帰り登山だった。最後に「帰りの汽車で死んだように眠った」と書いてあり、朝早かったのか、とても疲れていたのだろうか。

## 聞こう会

会場：深田久弥山の文化館 聴山房  
時間：午後一時三十分～三時

七月十二日（日）

演題：白山の生物  
講師：真栄隆昭氏

八月二十三日（日）

演題：白山の霊木 つなぎぶしの檜  
講師：大庭保夫氏  
（深田久弥と山の文化を愛する会）

九月十三日（日）

演題：大聖寺城の歴史と保存維持活動  
講師：毛利 修氏  
（錦城山城址保存会 会長）

## 読書会

会場：深田久弥山の文化館  
時間：午後一時三十分～三時

七月十七日（金）

『日本百名山』より「瑞牆山」

九月十八日（金）

『日本百名山』より「常念岳」

ホームページもよろしく

<https://yamanobunkakan.com>



深田久弥山の文化館



山文HP